Carlo Perfetti先生を偲んで

池田由美

カルロ・ペルフェッティ先生は，神経科医であり，認知神経リハビリテーションの開発者である。認知神経リハビリテーションは，1970年初頭，イタリアにおいて，片麻痺者の手の機能の改善を図る運動療法として開発され，その後，片麻痺者の歩行，高次脳機能障害，整形外科疾患，小児領域へと展開され続けている運動療法である。開発当時，ほとんどの片麻痺者はなんらかの形で歩くことができるようになるにもかかわらず，手の機能回復は思わしくない現状にあった。それを打破するにあたり，手は身体部位の中でも大脳皮質の運動野に最も密接に繋がった皮質器官であり，手の筋の機能的な動きは，“触覚の求心性情報の制御下にある”という論文の知見から手の機能的特性として“接触”に着目し，触覚受容器を刺激するような課題を行えば手の機能が回復するのではないかという着想のもと，物体に指で触れたときの感触を介して物体を識別するというタブレット課題が開発された。そして今日まで患者の現象を観察することを主眼とし，そこから立ち上がる問題を検証する手段として訓練課題を設定し，脳と身体に関連する最新の神経生理学，認知心理学，教育学，哲学等の知見を融合しながら種々の訓練課題が開発されてきた。

認知神経リハビリテーションは1990年半ばに高知医療学院の宮本省三先生が日本に持ち込まれ「認知運動療法」として紹介された。2000年には日本認知運動療法研究会（現・(一社)認知神経リハビリテーション学会）が創設され，今日に至っている。

私が認知神経リハビリテーションと出会ったのは1996年である。当時，運動学習を研究のテーマとしていた私は，「認知運動療法」という言葉にいったいどんなことをやるのか興味がわき，ベーシックコースへ参加した。高知の地で宮本省三先生や沖田一彦先生（元・県立広島大学），森岡周先生（現・畿央大学）から認知運動療法の講義を受け，どうやら運動学習をリハビリテーションに取り入れているようだということがわかり，ますます興味がわいた。その後，1999年に日本で初めてのアドバンスコースが開催された。そこへイタリア人のセラピストであるFranca Pantè（フランカ・パンテ）さんが講師として来日されて，「認知運動療法」を目の当たりにすることになった。想像していたのものとはかなりかけ離れた内容であった。さらに関心が高まり，2000年の1月から約2か月半，イタリアでペルフェッティ先生とパンテさんのもとで研修することになった。その時に初めてペルフェッティ先生とお会いした。第一印象は，ダンディな感じで，笑顔がとても素敵だと思った。私がイタリア語を話せないことがわかると「どうしてイタリア語を勉強してこなかったの？」と聞かれ，私が答えに困っていると，「Fronte（額），Naso（鼻），Bocca（口）くらいが解ればいいか」というようなこと私の額と鼻に触れながらおっしゃった（と思う）。それからパンテさんの指導のもと研修が始まり，身体の部位のイタリア語くらいは徐々に覚えることができた。ペルフェッティ先生は時々訓練しているところへやってきては，現在の状況とどんな訓練をしているのかについてセラピストから説明を受け，アドバイスをされていた。アドバイスと言っても，アドバイスを受けたセラピストはそれをそのまま鵜呑みにすることはほとんどなく，患者は

そっちのけで，ペルフェッティ先生とセラピストとの間で活発なディスカッションが展開されることがしばしばあった。日本では考えられない光景であり，患者は自分のことを目の前でこんなにメタメタに言われて大丈夫なのか心配になることもあった。しかし，そこには患者をなんとかしたい，もっと回復につながる運動療法はないのかという止まない追求と患者とセラピストへの愛があるように思えた。

ペルフェッティ先生の講義の中で私が最も印象に残っているのは，“リハビリテーションは驚きから始まる”である。よいリハビリテーションにたどり着くためにはどうやって知を極めていったらよいのか，ということについて話された講義である。アリストテレスやカール・ポパーを引用し，“驚き”から新たな「知」が生まれる，事実を観察しているだけでは科学は生まれない，科学は問題を提示することから始まり，それに対する解決策である仮説を提示し，そして仮説を批判，検証することで科学は進歩していく。自分の見ていること，観察することに“これは何だろう，何でだろう”と考えてみる能力，既に自分が知っていることだけに満足せず，次々と質問を発していくこと，優秀なリハビリテーション専門家というのは患者を観察して観察した事実の中から問題をみつけることができる，“問題は裏切られた期待である”。これらの発言には，運動・行為の回復のために長年向き合ってこられたペルフェッティ先生の姿勢が現われているように感じる。そして，前向きに進む気持ちにさせてもらえる言葉でもある。

ペルフェッティ先生らしさと言えば，水色のシャツに紺のセーター，赤いマフラーがトレードマークであった。仕事中のペルフェッティ先生は思いにふけっている姿や，鋭い眼差しがとても印象に残っている。仕事以外の時間はいつも優しい笑顔を見せ，目が合えばウィンクが返ってくるお茶目な姿もあった。出不精であり飛行機嫌いだったそうで，日本での講演が叶わなかったことは少し残念であるが，ペルフェッティ先生が来られなければこちらから行くしかない。そうやって引き寄せられてイタリアの地を踏んだ日本人のセラピストもたくさんいたことだろう。

ペルフェッティ先生，ありがとうございます。“驚き”を忘れないようにしよう。

〈主な著書〉

1) Perfetti C: La reeducation motoria dell emiplegico（片麻痺の運動再教育）. Collana di Riabitazione Medica 7, Ghedini Editore, Milano, 1979.
2) Perfetti C: Condotte terapeutiche per la reeducazion motoria dell emiplegico（片麻痺の運動再教育のための治療訓練）. Collana di Riabitazione Medica 11, Ghedini Editore, Milano, 1986.
3) Puccini P・Perfetti C: Intervento riabilitativo nel bambino affetto da paralisi cerebrale infantile. Edizioni sbm, 1987.（小池美納・松葉包宜訳：子どもの発達と認知運動療法．協同医書出版社，2000.）
4) Perfetti C: UOMINI E MACCHINE（人間と機械）; Riflessioni sul sapere riabilitativo.Editrice Speciale RIABILITAZIONE, 1987.
5) Perfetti C: Der hemiphegischer patinnt（片麻痺患者）；Cognitiv-therapeutische ubungen. Pflaum, Munchen, 1997.
6) Perfetti C・宮本省三・沖田一彦（小池美納訳）：認知運動療法；運動機能再教育の新しいパラダイム．協同医書出版社，1998.
7) Perfetti C: “La Magnifica Academia di Lagado” di Jonathan Swift（ジョナサン・スウィフトによるラガード・アカデミーの素晴らしさ）；Lanterne, Biblioteca A. R. LURIJA, 2001.
8) Perfetti C: Vivere la conoscenza（認知を生きる）. ARS, Schio, 2001.
9) Perfetti C: Storie di palestra（訓練室の物語）. ARS, Il Grandevetro, 2003.
10) Perfetti C: Esperienza cosciente azione e recupero（行為の意識経験と回復）. Centro studio di riabilitazione neurocognitiva, Villa Miari,

Santorso, 2004.

11) Perfetti C・Pante F・Rizzello C: Esercizio terapeutico conoscitivo: Sussidi, fumagalliriabilitazione, 2005.（小池美納訳：認知運動療法と道具;差異を生み出す差異をつくる．協同医書出版社，2006.

12) Perfetti C（小池美納訳）：脳のリハビリテーション；認知運動療法の提言〈中枢神経疾患〉．協同医書出版社，2005.

13) Perfetti C（小池美納訳）：脳のリハビリテーション；認知運動療法の提言〈整形外科的疾患〉．協同医書出版社，2007.

14) Perfetti C, Chiappin S:Il CORPO LA STORIA LA VITA（身体, 物語, 人生）. Centro studio di riabilitazione neurocognitiva ,Villa Miari, Santorso, 2007.

15) Perfetti C Chiappin S: Una emozione chiamata dolore（痛みと呼ばれる情動）. Centro studio di riabilitazione neurocognitiva ,Villa Miari, Santorso, 2008.

16) Perfetti C Chiappin C: LO SPECCHIO DEL CERVELLO（脳の鏡）. Grafico Turato Edizioni, 2009

17) Perfetti C Pieroni A: UN LUNGO VIAGGIO ATTRAVERSO LA CONOSCENZA（認知をめぐる長い旅路）. Centro studio di riabilitazione neurocognitiva ,Villa Miari, Santorso, 2012

18) Perfetti C Giannarelli G: Mano ... Mano morta?（手…手は死んだのか?）Massa, 2012

19) Perfetti C: 身体と精神;ロマンチックサイエンスとしての認知神経リハビリテーション．協同医書出版社，2012.

20) Perfetti C: Il Dolore come problema riabilitativo. Piccin-Nuova Libraria, 2015.（小池美納・朝岡直芽訳:疼痛の認知神経リハビリテーション．協同医書出版社，2016.

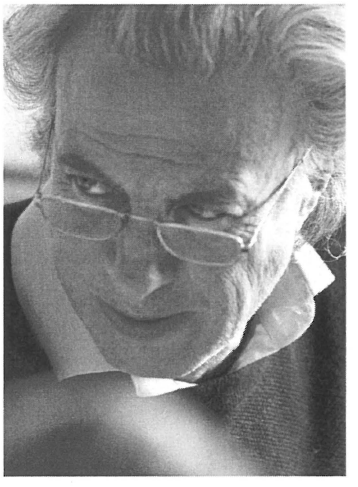
21) Perfetti C（小池美納訳）：認知神経リハビリテーション入門．協同医書出版社，2016.

22) Perfetti C（小池美納訳）：失語症の認知神経リハビリテーション．協同医書出版社，2018.

23) Perfetti C: Lezioni ai giapponesi（日本人セラピストへの講義）. Centro studio di riabilitazione neurocognitiva, Villa Miari, Santorso, 2019.

24) Perfetti C（小池美納訳）：認知神経リハビリテーションの誕生;身体と精神をめぐる思索．協同医書出版社，2021.

＊主な著作のリストは高知医療学院の宮本省三先生に作成して頂きました。御礼申し上げます。



Calro Perfetti（カルロ・ペルフェッティ）

1940年　イタリア，トスカーナ州マッサ－カッラーラ県ルジニアーナで生まれる．

1964年　ピサ大学医学部卒業．神経病，精神病の臨床が専門．

神経精神病臨床の教授資格を持つ．

1968年　神経学クリニックにおいてリハビリテーションに従事．

1971年　Silvini GFとともに“cortical facilitation”と呼ばれる新しい方法論を開発．

1974年　カランブローネ病院リハビリテーション科の責任者となり，トスカーナ州政府の運営する「リハビリテーション・セラピスト養成校」を主催する．

1984年　ベネト州ヴィチェンツァ県スキオ第4保健機構スキオ病院リハビリテーション部局・医長となる．

1991年　ベネト州ヴィチェンツァ県スキオ第4保健機構，リハビリテーション・セラピスト養成校学長．

2002年　スキオ近郊のサントルソのヴィラ・ミアーリに「認知神経リハビリテーションセンター」を設立し，所長となる．付属学校（講師養成コース）も併設．

ジャーナル「Riabilitazione Neurocognitiva」を発行．

イタリア，ドイツ，スペイン，オーストリア等のヨーロッパ各国，日本および韓国からの研修生を受け入れながら，臨床研究を続ける．

2008年　健康上の理由により所長を退く．

2020年12月　故郷ルニジアーナにて逝去．享年80．

（カルロ・ペルフェッティ：ペルフェッティ・パースペクティブ［Ⅰ］認知神経リハビリテーションの誕生－身体と精神をめぐる思索．小池美納（訳）．宮本省三（編）．株式会社協同医書出版，東京．2021．より一部改変して引用．）